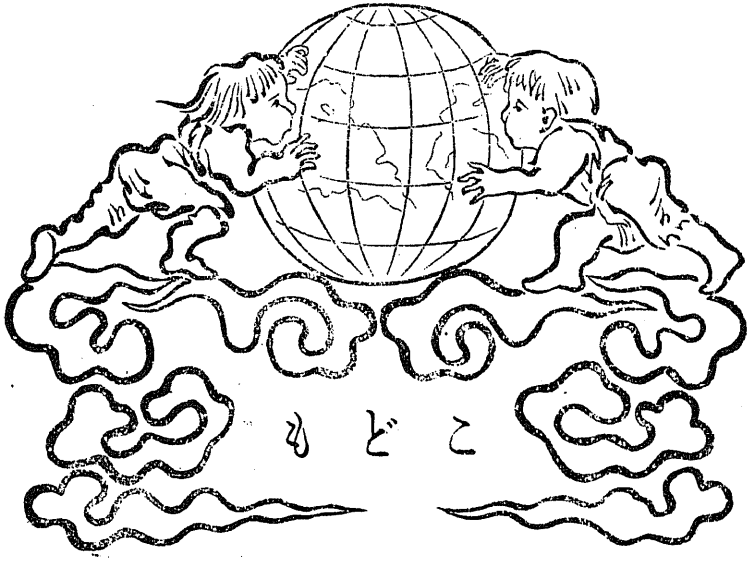
婦人と子ども
第貳卷第七號



鵞鳥の念佛

やまとの翁

皆さんわ、あひるのよーな鳥で首のながい　大きなよー肥え太つた鵞鳥をご存じでしよー。あまり大きくって　肥えて居るから　とても他の鳥のよーに飛ぶことわ　できないです。けども水の中と來たもんなら、泳ぐことにかけてわ、夫わ

〳〵達者で、他の鳥などわ　とても叶いっこなしです。そしていつも　ガア〳〵ガア〳〵とないています。

ある日の夕かたでした。この鶯鳥どもが　大勢でガア〳〵ガア〳〵とないて　草の中をあるいていた所え、どこから　やってきたんでしょー？　ヒョイと一匹の狐が飛び出してきました。

すると　さー　鶯鳥どもわ　びっくりして　みんなが　一度に走ってにげよーとしますと、狐わ　おそろしい　こわい目付きをして　みんなの前えたちふさがって、

『なにも　みんな其よーに　あわてゝ逃げなくっても　いーじやないか、僕わ、こんばん　君がたの所え、ごちそーになりにきたつもりなんだよ、さー一人づゝ、ちゃんと列を造っておと

なしく、そこえおならびなさい、端から一人づゝ食べて上げるのだから』

こーいって　狐わ大勢を片端から　ぐっとにらみ廻すのです。そこで鷲鳥どもわ　みんな　ぶる〳〵ふるえて　顔の色を眞青にして『どーしよー〳〵』といって　こそ〳〵相談をしています。

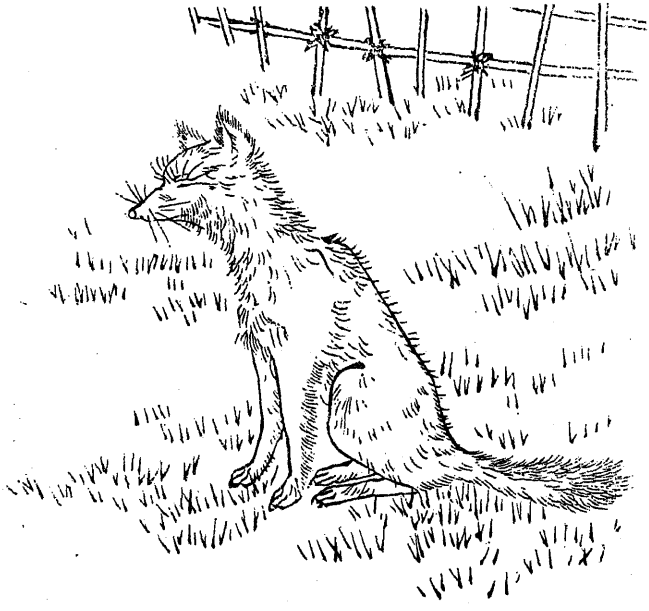
『あー困ったなー』と一羽の大きな鷲鳥がいーますと、

『僕わ　あそこの枝にとまってる鳥に生れゝば　よかったと思うよ』これわ鷲鳥の子がゆーのです。

『私ねー　ほら　お寺の屋根なんかにいる鳩ね、あの鳩になりたいわ』これわ小さな雌の鷲鳥がゆーのです。けども　こんな

ことばかし　いっていても　仕方がありませんから、皆で　一度　助けてくれるよーに　願って見よーじゃないか　とゆーことに相談をきめて、狐に夫を願って見たのでしたが、中々許してくれ相にもないのです、まー憎いじゃありませんかこーゆーんですもの、

『なにっ、命を助けてくれとゆーのか、そりゃ　いけない。君がたわ　僕に食べられゝば夫でいーのじゃないか、許



してくれもなにも　あったものじゃない、死ねば　夫でいーのだ』

こーなんですから、もーみんなも仕方がないと思って大變哀しんでいました所が、其中で一ぱん　大きな鵞鳥がひょっと思ひついたと見えて狐の前えでて　いーますにわ、

『ねー　狐さん、こーしてみんなが　あなたに食べられて死ぬのだと　なって見れば　夫わ

もー仕方がないのですが、どーか　吾々が死んだあとでわ、みんなつれだって　極樂え行けるよーに　おねんぶつを　いわして下さいませんか、ね、これだけわ　ゆるしてください、其おねんぶつが　すんだら、其後で　みんなおとなしく列を造ってならびますから　そしたら　一番肥えた　おいし相なのから、先えお食べ下さいませんか』

こーいったもんですから　狐わ

『フン　念佛をもーすと　ゆーのか　夫わいーだろーなー　信心なこったから　夫だけなら許してやるから、はやく念佛を申しなさい、すむまで　まってあげる』

そこで　一番大きな鷲鳥が　ガア〳〵ガアといって　ながい

ながい　念佛を始めました。　所が二番目の鷲鳥わ、　夫が中々すまないもんだから　また　ガア〳〵ガア〳〵といって　念佛を始める、しますと三番目のも　四番目のも　五番目のも　夫から　みんなが　續いて始めましたもんですから、　大勢が一度に　ガア〳〵ガア〳〵と　念佛をいっています。

狐わ　しかたが　ありませんから　約束通り　ちゃんと　座って　夫がすむのをまっています。

そこで、このはなしのつゞきも、大勢の念佛が　すみますとすぐに、始まるのですが、まだ仲々已めないで　いってるだろーと思います。　めでたし〳〵。

（おしまい）